

# 家族背景と児童特性の関連における性差

頬 藤 和 寛

## 1. はじめに

性差に関する言明は20世紀前半まで当然の前提とされ、後半に至って一種のタブーとなった觀がある。これは、いまでもなくフェミニズムの勃興による性差別主義者への批判的風潮に基づく。

とはいえ、E. マッコビィら<sup>2)</sup>以下、今日まで生理・心理・社会的各側面における性差研究も地道に積み重ねられており<sup>4)</sup>、特に近年では脳の性差に関する自然科学的知見<sup>1)</sup>が次々に報告されるようになってきた。

そもそも、二つのカテゴリー間になんらかの点で差のあることを確認することが、両者の差別を正当化することに直結しないのは自明の理である。さもなければ、黒人・黄人・白人の間で皮膚メラニン色素量に差があることまで否認しなければならなくなるであろう。さいわいにして、これまで確認されている性差は、そのほとんどが優劣を示すものではなく、また一部の特性に明らかな優劣を認めて、別の一部では必ず逆転している。

総じて今日まで、人間の男女（べつに女男といってもよいが耳障りであろう）は動物の雌雄（！）と同じく、だいたい似たようなものだが部分的には異なった点もあるという妥当な結論が覆されたことはない。もっとも、たとえ部分的でもいったん差を認めると、伝統的かつ抑圧的な社会的分業イデオロギーに加担してしまうという議論も成立するであろう。しかし事実は事実である。当為と混同されてはならない。

たとえば行動生態学の S. フルディ<sup>2),5)</sup>は、つとに生物学的事実をもってして性差別解消の論拠とすることを放棄している。賢明な彼女は、事実がどうであれ人々の政治的努力によってしか差別はなくならない、と覚悟したもようである。

ところで筆者は、ここ数年の行動研究の副産物として性差に関する二、三の知見を得たので、以下に報告したい（ただし、成人における体質・性格・罹病傾向の間の関連に関する性差については、すでに他誌<sup>9)</sup>や学会に発表したので割愛する）。これらが、従来の多くの性差研究と趣きを異にしている点は、心理行動的側面における「結果としての差」ではなく、家族背景と児童特性との間の関連そのものに性差があるとしていることである。実際、測定された児童の行動特性には、ほとんど性差を認めなかった。つまり、測定された結果としての諸特性に性差がなかったとしても、それらが養育条件や家族背景とどのように相関しているかには性差が認められる可能性のあることに注意を喚起したい。

## 2. 調査結果 1：小中高校生の抑鬱傾向と家庭評価

平成 2 年に大阪府学校保健会が実施した「心の健康実態調査」<sup>8)</sup>において無記名アンケート法により、府下の小学 5 年生 714 名、中学 2 年生 1,768 名、高校 2 年生 2,951 名について有効回答を得た。

そのうち無作為抽出によって小学生 150 例（男女とも各 75 名）、中学生 150 例（男子 84 名、女子 66 名）、高校生 200 例（男女とも各 100 例で、公立・私立数校の混成）を分析対象とした。なお、小中はすべて公立校である。

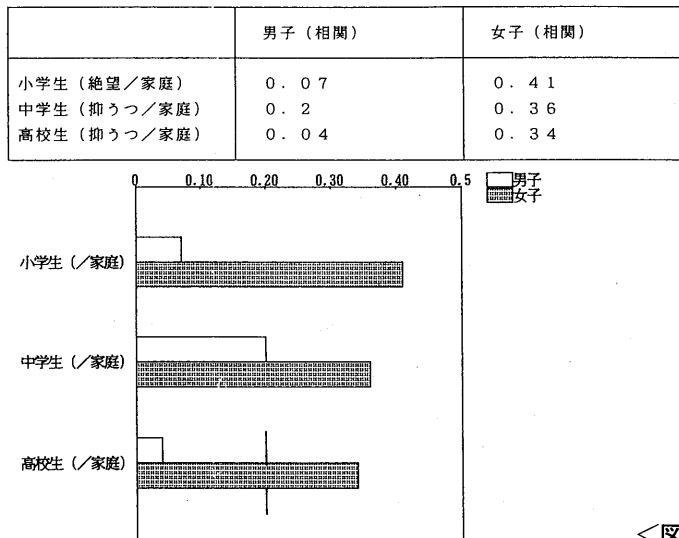
心身愁訴に関する 27 項目（いずれも順位尺度 4 件法で回答）の因子分析（共通性の推定は SMC により、主因子解で固有値 1 以上の共通因子を、バリマクス基準で回転し単純構造を得たもの。以下同様）によると、小学生で第三因子、中学生・高校生において最大の因子寄与を示した第一因子は、いずれも「絶望」「抑鬱」を反映したものであった。

### 家族背景と児童特性の関連における性差

小学生の第三因子である「絶望因子」において因子負荷の大きい(0.5以上)項目は「死にたくなる・どうでもよい・(何をしても) 楽しくない・何かを傷つけたい」の順で、中学生の第一因子「抑うつ因子」では「どうでもよい・ぼんやり・自分がイヤ・やる気ない・楽しくない」、高校生の第一因子「抑うつ因子」では「どうでもよい・自分がイヤ・死にたくなる・考えまとまらず」の順であった。

発達段階によって順位は一部変動するが、これらは全て子どもたちの厭世・絶望・抑鬱・投げやりな状態や気分を濃厚に反映した因子であることがわかる。

さて、同調査では子どもたちに「家庭の樂しくなさ(家庭の樂しさの逆得点)」も質問しており、これは「楽しい・まあまあ楽しい・楽しくない・まったく楽しくない」の4件法で回答させている。この度合いと小学生の「絶望因子」、中学生・高校生の「抑うつ因子」の度合い(因子得点)との相関係数を男女別に計算したところ、顕著な性差がみられた(図1)。



## 家族背景と児童特性の関連における性差

男子で辛うじて5%の有意水準にひっかかりそうなのは中学生のみで、まして小学生や高校生では「家庭の楽しさ」と絶望ないし抑うつ因子が無相関といってよい。これに対して、女子では小中高校生すべてにおいて1~0.5%以下の危険率で有意な相関を示した。

すなわち、男子において「家庭の楽しさ」がほとんど絶望・抑うつ因子に関連せず、女子においては学齢期を通じて「家庭の楽しさ」が絶望・抑うつとマイナスの関係を示している（「家庭の樂しくなさ」と0.34~0.41の正の相関）。

ちなみに、絶望・抑うつ因子の因子得点そのものは小中高校生3群のいずれにおいても統計上有意な性差を認めない。

### 3. 調査結果2：不適応児童の行動特性と養育背景

平成6年度に大阪府子ども家庭センターにおいて個別に面接された学校不適応・逸脱事例154例について、行動特性17項目と家族・養育条件その他16項目が評定されている。

対象の内訳は、不登校事例94（男子43例、女子51例、平均年齢12.4）と非行・逸脱事例60（男子38例、女子22例、平均年齢13.8）である。

行動特性17項目については順位尺度5件法によって精神科医ないし臨床心理士が評定し、その評価点は因子分析によって「社会的成熟の因子」「社会的外向の因子」「神経症傾向の因子」の3因子に縮約された（表1）。

「社会的成熟」とは人格成熟・対人感覚・想像力などと関連する社会性発達の指標で、「社会的外向」とは活動性・社交性・言語性（おしゃべり）に関連する指標、「神経症傾向」は神経症度（不安と症状）・依存性・遵法性のような陰性情動や枠組み依存の傾向と強く関連している。

男女別に、これらの因子と16項目の家族・養育条件変数との相関をみると（表2）、多くの点で性差が認められるのがわかる。

いずれの因子も同胞数・出生順位・住宅事情・母の対人交流とはなんらの相関も示さないし、そもそも「社会的外向」の因子ではいかなる背景条件項目と

家族背景と児童特性の関連における性差

行動特性項目	第一因子	第二因子	第三因子
活動性	0.04	0.74☆	0.14
言語性	0.23	0.72☆	0.13
社交性	0.08	0.73☆	-0.20
対人感覚	0.75☆	-0.07	0.11
対処技術	0.52	0.34	-0.28
遵法性	0.45	-0.54	0.39☆
意欲	0.66	0.20	0.00
自己評価	0.01	0.43	-0.08
攻撃性	-0.08	0.38	-0.06
将来指向	0.60	0.04	-0.23
情動統制	0.53	-0.50	0.11
想像力	0.74☆	-0.09	0.10
依存性	-0.35	0.10	0.47☆
対人緊張	0.06	-0.66	0.35
人格成熟	0.77☆	-0.21	-0.13
知能	0.67	0.10	-0.00
神経症度	0.08	-0.33	0.56☆
因子寄与	3.88	3.23	1.06
因子の命名	社会的成熟：M	社会的外向：E	神経症傾向：N

註：上位3番までの因子負荷に☆印

＜表1＞

も関連しない。

背景条件と「社会的成熟」の関連では男子で10項目と、女子で5項目と有意な相関を示すのに対して、「神経症傾向」では男子で2項目と、女子で7項目との間に有意な相関係数を認められる。特に「神経症傾向」のように、絶望・抑うつと並んで陰性情動を基盤にした傾向が、女子でより強く家族・養育背景条

家族背景と児童特性の関連における性差

有意な単相関係数を ↑ / ♀として表示

家庭要因項目	社会的成熟	社会的外向	神経症傾向
同胞数	-/-	-/-	-/-
出生順位	-/-	-/-	-/-
家庭内規範	0.36 / 0.46	-/-	-/0.32
親族との交流度	0.34 / -	-/-	-/0.32
家族の問題対応力	0.31 / 0.34	-/-	-/-
社会経済階層	0.32 / -	-/-	-/-
住宅事情	-/-	-/-	-/-
近隣との交流度	0.31 / -	-/-	-/-
母子関係濃度	0.33 / -	-/-	0.30 / 0.31
家族間のつながり	0.35 / -	-/-	-/0.42
母親役割達成度	-/0.41	-/-	0.33 / 0.36
母の問題処理能力	0.32 / 0.45	-/-	-/0.36
母の対人交流	-/-	-/-	-/-
父子関係	0.39 / -	-/-	-/0.33
父親役割達成度	0.36 / -	-/-	-/-
父の社会的能力	-/0.39	-/-	-/-

<表2>

件と関連することは興味ある結果であった。

男子の「神経症傾向」が、母子関係濃度や母の役割達成度とだけ正の相関を示したことは、むしろ家族背景における母親の好条件が男児に「神経症傾向」を助長することを暗示する。もちろん、相関関係は因果の方向まで保証しないから、たまたま「神経症傾向」の高い男児に対し母親が母子関係を濃厚にし、また母親役割をより達成しようとするこを反映しているのかもしれない。

これに対して、女子では男子と違って、家庭内規範・親族との交流・家族間のつながり・母の問題処理能力・父子関係などとも「神経症傾向」が正に相関

していた。これらもまた、家族関係において従来、好ましいとされてきた諸特徴である。

女子の陰性情動特性は、調査結果1における自記式質問紙法によっても、またこの専門職による評定によっても、男子に比して家族背景と強い関連を示すという共通点があるのだが、アンケートでは「楽しくなさ」が抑うつを助長し、アセスメントでは家族機能の好条件が神経症傾向や不安に対して促進的であるようにみえる。調査結果1の主観性と調査結果2の専門職評定という方法論の相違を重視するなら、女子の抑うつや不安は主観的な「家庭の楽しくなさ」と、また客観的な「家族機能の高さ」とに有意に相関するとまとめられるだろう。こうした関連は男子ではほぼ無視できるのである。

いずれにせよ、まったく調査法が異なる二つの結果の共通点としては、陰性情動特性に関して女子のほうが男子より、一層家族背景と密接な関連を示すというにとどまる。

#### 4. 調査結果3：家族変数による中学生行動特性の因果分析

対象は昭和63年度から平成3年度にかけて、大阪府の児童相談所において精神科医ないし心理判定員によって面接・評定された12~15歳（中学生）の事例、男子104例、女子52例である。内訳は、反社会的事例71例、非社会的事例55例、その他30例で、明らかな器質的心身障害児ケースを含まない。

調査・評定項目の一覧を表3に示す（表3）。

行動特性13項目の資料を因子分析することによって、「外向性（社会的外向）」「成熟性（社会性の成熟度）」「内発性（想像力や知性）」という3因子を得た（表4）。

背景項目のうち、従来から重視されている養育環境要因5項目を選び、時間的関係と因果関係の方向を考慮したパス図式を構成した（図2）。

おのおのの矢印に付された数値はパス係数であって、因果関係の強度を示し、そのほぼ自乗値が結果変数の分散のうちどの程度を説明するかの指標である。慣例として0.05以下のパス係数の因果関連については矢印を省略してあ

家族背景と児童特性の関連における性差

＜表3＞ 調査項目の内容と評価基準

	内容と評価基準	
背景		
性 別	男子=0、女子=1とダミー変数化	
年 令	暦年令(満年令)とし、月齢は6捨7入とする	
同 胞 数	本人を含んだ人数	
出 生 順 位	順位を数値にしてそのまま入力	
S E S	社会経済階層を4段階評価(1~4とし、4ほど高い)	
養 育 様 式	拒否-放任-適度-過保護の4段階(保護的養育関与尺度)	
~3歳母性	3歳までの母性的養育関与の篤さ(1~4と尺度化)	
〃 父性	3歳までの父性的養育関与度(同上)	
4歳~母性	4歳以後の母性的養育関与の篤さ(同上)	
〃 父性	4歳以後の父性的養育関与度(同上)	
父 母 関 係	父母の夫婦関係(1~4とし、欠-不良-普通-良好)	
同 胞 関 係	本人と同胞との関係(同上)	
現状(4段階評価)		
初 期 緊 張	面接時の初期緊張(1~4とし、4は過度の緊張)	
学 業 繫 留	学業へのコミット尺度(1=放棄から 4=熱心まで)	
非 行 深 度	非行・触法の尺度(1=模範生から 4=常習化まで)	
性 的 関 心	関心や行動化の度合(1=なしから 4=目立つまで)	
家 庭 内 適 応	家庭内の適応状態(1=不良から 4=良好まで)	
家 庭 外 適 応	学校や地域での適応(同上)	
特性(5段階評価)		
↑ 齢相応		
活 動 性	身体的活動性(1=寡動から 5=じっとしないまで)	3点
言 語 性	おしゃべりの度合(1=緘默から 5=多弁まで)	3
社 交 性	交友の範囲(1=孤立から 5=社交的まで)	3
対 人 感 覚	対人状況の把握(1=無関心から 5=正確・敏感まで)	3
遵 法 性	ルールへの順順(1=なし・無反省から 5=高いまで)	3
意 慮 欲	動機づけの度合(1=やる気なしから 5=意欲まんまんまで)	3
攻 撃 性	自他への攻撃傾向(1=欠如から 5=高いまで)	3
情 動 統 制	情意のコントロール(1=無統制から 5=統制良好まで)	3
想 像 力	イメージの拡がり(1=欠如・即物的から 5=空想豊富まで)	3
対 人 緊 張	対人場面の緊張度(1=鈍感から 5=過度の緊張まで)	3
人 格 成 熟	暦年令を考慮した社会性(1=ごく未熟から 5=年令以上まで)	4
知 能	1=遅滞 2=境界域 3=平均以下 4=平均以上 5=優秀	2
神 経 症 度	1=情緒安定高度から 5=症状(+)生活に支障まで	2

家族背景と児童特性の関連における性差

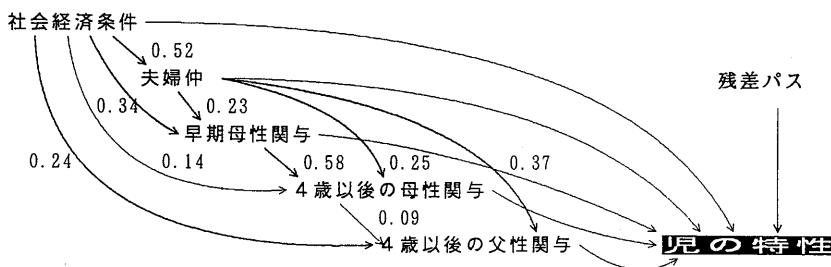
<表4> 行動特性の因子分析

因子 行動特性	I	II	III	共通性
活動性	0.65	-0.13	0.27	0.51
言語性	0.68	0.02	0.36	0.59
社交性	0.78	0.17	0.08	0.64
対人感覚	0.12	0.55	0.09	0.32
遵法性	-0.57	0.32	0.24	0.48
意欲	0.50	0.21	0.39	0.45
攻撃性	0.45	-0.31	0.37	0.44
情動統制	-0.38	0.63	-0.05	0.54
想像性	-0.02	0.08	0.58	0.34
対人緊張	-0.69	0.08	0.07	0.49
人格成熟	0.02	0.68	0.17	0.49
知能	0.07	0.31	0.47	0.32
神経症度	-0.60	-0.07	0.36	0.50
因子寄与 命名	3.25	1.56	1.29	
	外向性	成熟性	内発性	

る。また、残差パス ( $R$ ) とは、説明変数である 5 要因以外からの影響力を示す。

このパス図式にしたがって男女別、行動特性因子別に因果分析を行った（図 3）。

<図2> 養育背景と行動特性

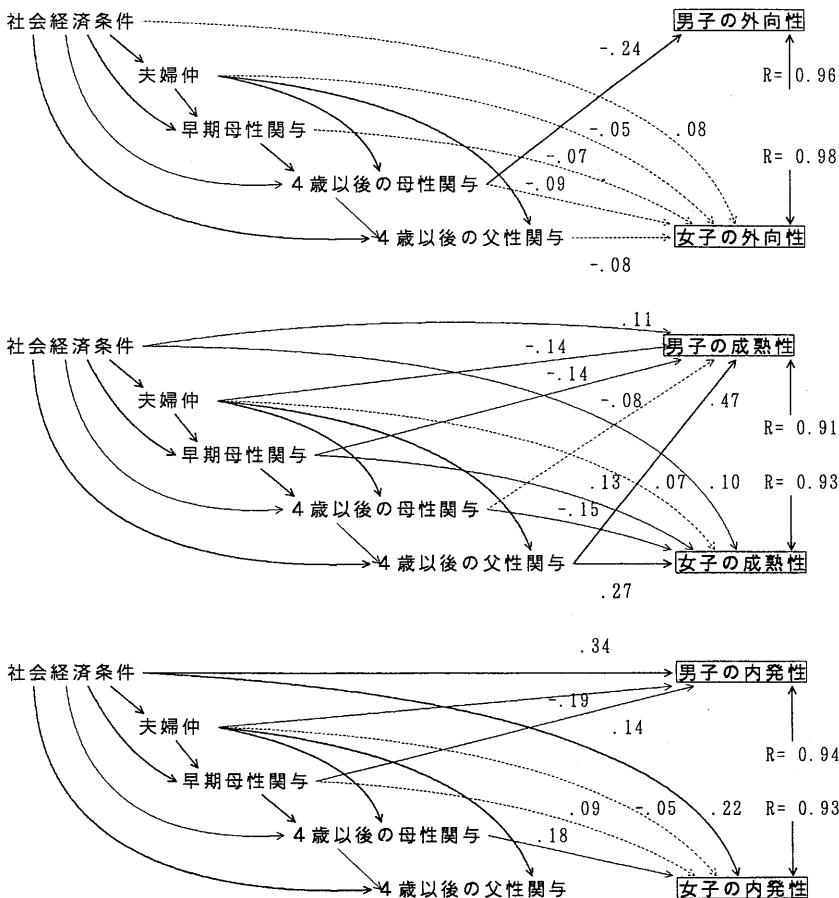


### 家族背景と児童特性の関連における性差

まず、「外向性」に関しては両性ともにほとんど家族背景 5 要因の影響を受けないが、男子では 4 歳以後の母性関与のみ 6% 弱の抑制効果が認められ、女子

<図 3> 環境反応性の性差

男子 n=104 女子 n=52



では全ての要因がそれぞれ0.5%前後の影響を及ぼしている。

「成熟性」においては男女ともに5要因すべてから14~17%の影響を蒙り、特に男子では父親からの影響が最大である（夫婦仲や母性関与はむしろ抑制的）。女子では、4歳以後の母性関与を除いて、好条件ほど成熟性にプラスに作用する。

「内発性」も「成熟性」同様の傾向はあるが、男女ともに家庭の社会経済条件が促進的に働き、父性関与の影響は少ない。特に、女子では4歳以後の母性関与によって促進されるのが男子との相違である。

## 5. 調査結果 補遺

前項と同じデータについて、男女別と、行動特性因子得点の大小で二分した外向群／内向群、成熟群／未熟群、内発群／低内発群の別に層別し、それぞれの因子得点が家族背景要因の階級によって差があるかどうかを一元配置分散分析および多重比較によって検定した（表5）。

これによると、性別によるよりも、外向性や内発性の大小のほうが行動特性が家族背景によって左右される相違が大きいことがうかがわれる。性差については、男子のほうが養育様式が保護的なほど、また母性関与が強いほど内向的になる傾向があるのに対し、女子ではその傾向がない（これは前項のパス解析による結果を裏付ける）。それ以外の性差はほぼ無視できる程度である。また男女ともに同じ傾向を示すのは、経済階層が高いほど内発性が高まり、父性関与が強いほど成熟性が高まることがだが、このことは他の層別のいずれにおいても認められやすい関連であった。

厳密にいうと、この分析は、たとえば「現在における外向性の高い群と低い群とでは、成熟性や内発性に関して家族背景要因との関連度が異なる」といったことを示すだけなのだが、外向性そのものが家族背景によってそれほど左右されない事実や、内発性が主として家庭の経済階層によって規定されるという事実からすると、「思春期において外向性が低い個体や内発性が高い個体ほど、

家族背景と児童特性の関連における性差

<表5> 児童相談所156例の層別分析

12~15歳 ♂n=104/♀n=52

ANOVAによる有意差検定で階級間に差を認めた項目対一覧

凡例 \* : 層別条件につき除外

有意差項目では 数値: f0 値 //: 階級に応じ増大 \: 同じく減少 △: 中位ほど増大

属性=		性 別	外向性	成熟性	内発性
背景要因	行動特性	男 女	高 n=76 低 n=80	高 n=72 低 n=84	高 n=79 低 n=77
同胞条件	外向性 成熟性 内発性		* *	* *	* *
経済階層	外向性 成熟性 内発性	/2.9 /3.0	* *	* *	* *
養育様式	外向性 成熟性 内発性	\4.1	* *\n△3.6\n/3.0	* *\n/3.1	\7.5\n△3.1
母性関与	外向性 成熟性 内発性	\2.9 △4.3	* *\n/3.7	* *	\9.0
父性関与	外向性 成熟性 内発性	△4.2 /7.6 /5.5	* *\n/4.9 /10.7	△7.3\n* *	\5.2 /7.6 /5.2 * *
両親関係	外向性 成熟性 内発性		* *	* *	* *
有意差のあった項目対=	5 ? 3	2 < 5	1 ? 2	4 > 2	

多くの家族背景要因によって行動特性が変容される」と読みえることが許されよう。

全体的にみて、行動特性と家族背景要因が関連しやすいかどうかは、性別によるよりも、むしろ内向的かどうか、内発性が高いかどうかという特性にかかっているように思われる。

以上の所見を総合すると、

- 1) 主として陰性情動の強度は女子において家族背景と、より強く関連する。
  - 2) 性別によって、特定の行動特性がどの家族背景と関連するかが違う（被影響性の性差）。
  - 3) 性差以上に、行動特性と養育環境条件との関連に差が出るのは児童の性格による群別であった（特に外向性と内発性の大小で異なり、内向的かつ高内発性の児童ほど養育環境条件による影響を蒙りやすい）。
- といったことが示唆される。

## 6. 考 察

以上に定量的なデータや結果として紹介した内容を、いま一度、定性的・文学的にまとめるなら、次のようになろうか。

まず、小・中・高校生を通じて、絶望・抑うつの愁訴の度合いは女子において「家庭の楽しさ」と逆の関係にある。つまり、女子ほど、絶望的・抑うつになった場合、家庭を楽しくないと感じる、あるいは、家庭が楽しくないほど絶望や抑うつに陥りやすい。男子ではこの傾向が希薄ないし皆無である。

次に、不安・依存・遵法性などを代表する神経症傾向についても、女子では男子より多くの家族背景変数と関連する。ただし、その多くは家族機能の高さに寄与するような要因であった。

この困惑させる結果に対して、次の二つの解釈可能性がある。まず第一に、絶望・抑うつの強い者と神経症傾向の高い者では家族背景が異なるとするものである。しかし、抑うつと不安が密接に関連することは精神医学・臨床心理学の常識であり、ともに非力感を伴う陰性情動であることが明らかである。正反対の家族背景と関連することなど考えにくい。第二には、一方のデータがアンケートによる主観的印象をとらえているのに対し、他方が専門職によるアセスメントに基づくことによる、とするものである。すなわち、陰性情動にとらわれた児童、特に女子は主観的に家庭を楽しくないと感じるにもかかわらず、第三者的な評定では客観的にそれほど家族機能が損なわれていないとみる。おそ

らく、このほうが事実に近いであろう。

もし、自記式質問紙法や本人の陳述のみに頼る方法論なら、子ども、特に女子の陰性情動の原因は家庭の暗さであると即断するかもしれない。しかし、他の方法論による結果も参照していくと、絶望や抑うつの度合いが強くなれば、家庭の客観的条件と無関係に「家庭が楽しくない」と感じる傾向も強まるためであることが判明してくる。また、この傾向に顕著な性差が認められたことにも注目すべきである。このことは、男子のほうが自らの絶望・抑うつによって家庭の実態を歪んで認知しないというより、おそらく男子の情動を規定する要因が家庭外の適応に偏っているためか、あるいは男子のほうが絶望や抑うつの原因を家庭状況に帰属させないためと思われる。

さらに、逆説的にも多くの家族背景面の好条件と女子の神経症的傾向が関連していた結果については、対象標本が不登校と非行を中心とするものであったことが主因ではないかと考えられる。すなわち、低不安型不適応である非行事例の背景に機能不全家族が多いことによるバイアスであろう（非行事例の家族背景が総じて不利なため、神経症傾向の強い不登校事例の家族背景が好条件に評価されてしまう）。こうしたアーティファクトが、なぜ女子に多く現れたのかはわからない。おそらく女子非行のほうが男子の場合に比べて家族背景の不利とより密接に関連しているのであろう。

ここで詳しく紹介はできないが、別の調査研究において児童相談所事例214例に関する家庭・養育背景10変数の因子分析によって得られた「家庭機能因子」と非行進度変数との相関係数をみると、男子は-0.25で有意水準に達しないのに対し、女子では-0.39と1%危険率で有意な関連を示したのである。つまり、女子の非行進度は男子に比べて家庭機能の不全とより密接に関係していた。

いずれにしても、男子より女子の情動特性のほうが家族関係全体の条件と関連づけやすいことは注目されてよい。同様の傾向は、うつ病の発病契機についても確認されている<sup>6)</sup>。これらの知見は、児童期・青春期・初老期を通じて、概

して男子より女子のほうが家族関係に感情状態を左右されやすいという側面と、また男子より女子のほうが家族関係への関心やコミットの度合いが大きいという側面を物語っている。このことが、進化の性差に基づく生来の傾向に由来するのか、女性が「家庭に縛りつけられてきた」歴史的経緯によるものなのか、についてはひとまず描く。ただ、現象として女児は発達早期から人間関係・情緒性指向的であるのに対し、男児は機械類・理念性指向的であることは従来から知られており<sup>3)</sup>、こうした基本的な性差が上記の陰性情動と家族背景の関連における男女差にも関与している可能性がある。

さて、情動特性とは直接関係のない行動特性である「外向性」「成熟性」「内発性」についてのパス解析の結果によると、全体として家族背景との関連度に顕著な性差は認められなかった。ただ、比較的家族関係との関連の大きい「成熟性」で母親・父親からの影響に性差がみられ、家族関係による規定性の低い「外向性」でも影響を及ぼす家族要因が男女で大きく異なることがうかがわれる。

もっとも、パス解析も含んで一般に相関分析・重回帰分析のモデルは、因果関係の方向を一義的に決定できるものではない。たとえば、4歳以後の母性関与が男子の外向性を6%（女子では0.8%）ほど抑制するような結果にしても、そのうちのいくぶんかは、男子が元々内向的であったので母親が4歳以後も濃厚に関与できたという逆の因果関係も疑わせる（このような因果の双方向性を考慮した統計解析手法は、まだ開発されていないようである）。男子に比して女子でこうした影響が少いのは、たとえばN. チョドロウラが指摘するように異性による養育と同性による養育とで影響の質が異なるためなのかもしれない。すなわち母親からの関与の影響は子どもが男児か女児かで相当異なるものと予想されるからである。

もっともこうした事実は、従来、母親が「子どもが男児か女児かによって対応を変えるためだ」とする、児童の受動モデル（子どもは養育者や養育環境から一方的に影響を受けるだけの存在と仮定する見方）に沿ってのみ解釈されて

きた。しかし、近年、児童の能動モデルに関心が集まり、子どもの側が養育条件に対して影響を及ぼす側面についての研究も進んでいる。そうなると、受動モデルからして子どもが男女いずれかによって養育条件から受ける影響が異なるという性差のみならず、能動モデルからして子どもが男女いずれかによって養育条件に及ぼす影響に性差のあることも考慮しなければならないことになる。母親は、自分の子どもが男児か女児かで対応を変えさせられるのかもしれないし、あるいはまた、同じように対応していても子どもが男児か女児かで受ける影響が異なるのかもしれない。おそらく実態は、それらが相半ばした相互作用を反映したものなのだろう。

最後に、今後も詳細な分析によって性格・行動と環境条件との関連の度合いについて男女の性差はさまざまに検出されるだろうが、外向性や内発性のような個人差のほうがもっと環境との相互作用の差をもたらすことに留意する必要がある。おそらく、環境からの影響は、対象が男子であるか女子であるかよりも、その個人が内向的であるかどうか、感受性豊かであるか否かにむしろ強く依存しているのであろう。

心理社会的な面では、個人差は性差を遙かに凌駕するのである。

## 7. 結 語

それぞれ異なった対象、異なったデータ収集法、異なった分析によって、家族背景と子どもの特性の間の関連について性差を検討した。その結果をまとめると、以下のようになる。

- 1) 小学生・中学生・高校生における絶望・抑うつ傾向が主観的な「家庭の楽しさ」と反比例する度合いは、いずれも女子において顕著で、男子ではほぼ無視できるものであった。
- 2) 非行・不登校などの不適応児童にみられる「神経症傾向」因子は、女子において多くの家族背景変数と有意に相關していた。男子ではむしろ「社会的成熟」因子が、多くの家族背景条件と関連する。

3) 児童相談所事例において評定された、情動特性と直接関係しない「外向性」「成熟性」「内発性」といった行動特性因子が家族・養育条件と関連する度合いには、全体として明らかな性差を認めなかった。しかし、どのような条件が比較的強く関連しているかという内容については、無視できない性差が検出された。

こうした所見は、女子の情緒状態が男子のそれに比して家族関係とより密接な関連を示すのではないかという可能性、また男女間で性差が認められない特性についても、それがいかなる家族背景と関連しているかという相關ないし被影響性の内訳には明らかな性差が認められる可能性を示唆するものである。

ただ、以上の性差は性格特性の個人差による関連度の違いには及ばない。すなわち、対象が男子か女子かという性別より、性格が内向的か外向的か、内面的か即物的かといった個人差のほうが、家族背景と行動特性との関連（おそらく家族背景からの被影響性）を一層強く規定するものらしい。

## 謝 辞

調査・評定について努力された大阪府学校保健会、大阪府子ども家庭センター心理職の皆様に感謝します。また、英文抄録について査読いただいた本学池見陽先生・正木芳子先生にも謝意を表します。

## 文 献

- 1) 新井康允：「ここまでわかった！女の脳・男の脳」ブルーバックス、講談社、1994
- 2) Bass, T. A. : *Reinventing the Future*. Addison-Wesley, 1994 「ヒトの再発見」茅野 訳、三田出版会、1995
- 3) Gilligan, C. : *In a Different Voice*. Harvard Univ. Press, 1982 「もうひとつの声」岩 男監訳、川島書店、1986
- 4) Houston, J. P., Bee, H. & Rimm, D. C. : *Introduction to Psychology*. Academic Press, 1983
- 5) Hrdy, S. B. : *The Woman Never Evolved*. Harvard Univ. Press, 1981 「女性は進化しなかったか」加藤・松本訳、思索社、1982 (1989 改題「女性の進化論」)

家族背景と児童特性の関連における性差

- 6) 乾正・頼藤和寛・村上光道・辻悟：「青春期と初老期のうつ病に関する考察」、精神医学 21巻 9号、1979
- 7) Maccoby, E. E. (ed.) : *The Development of Sex Differences*. Stanford Univ. Press, 1966「性差 その起源と役割」青木・池上・河野・深尾・山口訳、家政教育社、1979
- 8) 大阪府学校保健会：「心の健康実態調査 まとめ報告書」、1991
- 9) 頼藤和寛：「体質の研究 1-4」、からだの科学（日本評論社）Vol. 192-195、1996-1997

## Summary

# Some Sex Differences in the Relationship between Familial Background and Children's Traits

Kazuhiro Yorifuji

The present study focuses on the sex differences observed in transaction between an individual and the environment using the data obtained through three different sources.

The first data is based on a questionnaire investigation of 500 school-age children in 1990. It was shown that only females' depressive complaint remarkably correlated to reported familial discomfort.

The second data was obtained at the child-family center of Osaka Prefecture in 1994. 154 maladaptive children were interviewed and assessed individually by a psychiatrist or a psychologist there. Factor analysis of the 17 behavioral variables yielded three common factors: social maturity, extraversion, and neuroticism. It showed that the girls' neuroticism correlated to, paradoxically, many more advantageous family conditions than boys'.

The third data was obtained from the same interviewers having assessed the 13 items concerning behavioral characteristics of 156 adolescent cases, age 12 to 15, from 1988 to 1991. The variables were factor analyzed, yielding three factors as follows : extraversion, social maturity, and imaginativity. Although each factor scarcely showed sex difference in the relatedness to familial backgrounds, path analysis revealed that the

most influential nurture variable was different between males and females.

Overall, the findings indicate that the females' negative emotionality relates more closely to the familial background than males', and that some sex differences are detectable not only in behavioral trait itself but also in the relationship to family variables. The results are fairly striking, though it should be noted that the influence of environment varies more according to the difference of temperament or conditionability of the subject than the sex difference.